

Title	マスン『時の赴くままに』における「反復」研究ノート：バゲスン論文を参照しつつ
Author(s)	久保田, 勝己
Citation	IDUN -北欧研究-. 2011, 19, p. 147-177
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/96441">https://doi.org/10.18910/96441</a>
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# マスン『時の赴くままに』における「反復」研究ノート

## バゲスン論文を参照しつつ

久保田 勝己

### 1. はじめに

年来関心を抱いていた「反復」ということについて、キェルケゴール (Søren Kierkegaard 1813-55) の『反復』(*Gjentagelsen* 1843) を解説・考察する修士論文 (『「反復」研究序説 — Constantin Constantius *Gjentagelsen* 解説』) を書いて数年が経った。その後、キェルケゴールの影響を受けていると言われるスヴェン・オーウ・マスン (Sven Åge Madsen 1939-) の『時の赴くままに』(*Lad tiden gå* 1986) を読み、更にこのたびこの二つの小説に登場する「反復」を論じたセーアン・バゲスン (Søren Baggesen 1938-) の『「反復」及びスヴェン・オーウ・マスンの反復』 (“‘Gjentagelsen’ og Svend Åge Madsens gentagelser” 1993) を翻訳する機会を持った。本稿では、特にマスンの小説をバゲスンの論考を参照しつつ詳細に解説し、「反復」について考えるところを「研究序説」に続く「研究ノート」として報告したい。

セーアン・バゲスンは、RUC (Roskilde Universitetscenter) の文学教授で、オーゼンセにある「人間と自然」という名の人間主義研究センターの非常勤教授を兼ねており、science fiction (SF) のスペシャリストでもある。今回訳出した上記表題の論考は彼の SF を論じた三つの論文からなる *Natur/videnskab/fortælling* の中の一論文 (pp. 40-62) である。周知の通り、SF は「空想科学小説」とも呼ばれるが、そのジャンルとしての範囲は広く、内容的にも時代の変遷とともに大きく変化してきており、その定義を確定することは困難である。理性的・論理的であるはずの science と空想的・非論理的な fiction を結合したその名称からもそのことは窺えるのであるが、その二つの項の狭間にロマンが生まれ、「小説」として認知されるようになったのであろうか。したがって各人各様の定義しか見つけることは出来ないが、例えば SF の淵源がかのメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』(*FRANKENSTEIN* 1818-31) にあるというのが大方の意見 (集英社『世界文学事典』2002) であると知ると腑に落ちるところもあるであろう。また R.L. スティーヴンソンの『ジキル博士とハイド氏』(*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* 1886) は SF とは言えないかもしれないが、薬品の使用による人格の変化などを扱って

いることを考慮すると SF の系列に入れてもよいかもしれない。このように怪奇的な作品、しかもフランケンシュタイン博士とかジキル博士の活躍する小説を例に出すのは、やや片寄っているきらいもあるだろうが、実は本稿で扱うマスンの小説にもヤイデ (Jeyde)<sup>1</sup> 教授という怪人物とも言うべき物理学者が登場するからである。このマスンのポストモダニズムに属するであろう『時の赴くままに』をロマン主義時代のキェルケゴールの哲学小説『反復』と並べて料理するところにバゲスンの論文の奇抜と面白さがある。二つの小説に通底するテーマが時間であり、「反復」である。以下、バゲスンの論文の構成に沿って見てゆくことにする。

## 2. 『時の赴くままに』における『反復』

「コンスタンティン・コンスタンティウス (Constantin Constantius) は、キェルケゴールの仮名の一つである。この仮名問題は、キェルケゴール研究を過度に悩ませてきた、と言えよう。ここでは、コンスタンティン・コンスタンティウスはキェルケゴールの小説の語り手であり、その小説が『反復』である、と考えることにしたらどうだろうか」(Baggesen: 40) とバゲスンは始めるが、この出だしの数行に対して、いきなり長文の注をつける。

・・・ヘンレクスン<sup>2</sup> は、『反復』をキェルケゴールの仮名著作の一つとして読み、したがってそこからコンスタンティン・コンスタンティウスをテキストの書き手と見ることになるのだが、私はテキストをキェルケゴールが作者でコンスタンティン・コンスタンティウスが語り手の小説として読む。この読み方の違いは、極めて根本的なもので、ヘンレクスンがコンスタンティン・コンスタンティウスをその言葉通りに受け入れる(彼の書いたテキストだから)のに対して、私がこの小説中の出来事の伝達者にして解説者たるコンスタンティン・コンスタンティウスの信頼性を、文字通り徹底して慎重に受けとめようとしていることからくる・・・ (Baggesen: 114)

これは、一般論としてはたしかに重要な指摘ではあるが、このケースでは必ずしも的確であるとは言えない。ヘンレクスン説の場合、語り手は誰だと言うのであろうか。『反復』の語り手がコンスタンティン・コンスタンティウスであることは疑いの余地のないところである。問題は、やはりキェルケゴールの仮名に戻ってくる(但し、ここでは仮名問題については採り上げない)。バゲスンは、ヘンレクスン説では書き手が語っていることになると主張したいのであろうが、それは彼自身の説においても同じことである。コンスタンティン・コンスタンティウスという一人の人物を両様に解釈するのは恣意的である。コンスタンティン・コン

タンティウスがキェルケゴールの仮名人物であることは自明なのだから、この両者がどのような関係にあるかが重要なことなのであって、コンスタンティン・コンスタンティウスという語り手の信頼性の有無・大小もそこに根ざしていると考えべきであり、どちらのコンスタンティン・コンスタンティウスにも信頼性の問題は残る。ただ、バゲスンの注はこれに続く箇所、キェルケゴールの『反復』が虚構の散文作品であるというヘンレクスの意見に同調して、語り手の下に登場する人物たちが伝統的な意味での小説人物であることを確認しているところから見て、キェルケゴール自身の詩人・小説家忌避にも拘わらず、これら作品<sup>3</sup>はフィクションであり、語り手も必ずしも全面的には信頼出来ないと言いたかったのであろう。それに関しては、筆者も同調するし、ヘンレクスももとより同じ考えのはずである。かくて、この注は勇ましい割にはあまり功を奏したとは言えないのだが、さらに不思議なのはこの解釈戦略が以後の分析の中でほとんど活かされていないことである。それどころか、少し先には、「彼が書いている物語」(den fortælling han skriver) とか「彼のテキストにおいて」(i hans tekst) — han はいずれも明らかにコンスタンティン・コンスタンティウスを指している — といった紛らわしい表現さえ見受けられ (Baggesen: 51), 「語り手」と「書き手」の混同が起こっているが、これについては、これ以上深入りせず先へ進むことにする。

『反復』と『時の赴くままに』の間には、広い意味での間テキスト性のあらゆる要素が見い出される。バゲセンは、『反復』を『時の赴くままに』というメインテキスト (overtekst) と共演するサブテキスト (undertekst) と表現している (Baggesen: 53)。「反復」というテーマ/モチーフはもちろんのこと、構成・引用・言及・ほのめかし・パロディ等において両者は関係づけられているが、なおその上に究極の引用として『反復』という書物そのものが『時の赴くままに』の中に登場する。シングルマザーでオーフース大学の専任講師ヨハネ (Johanne) は、或る日娘を預けている保育園で、同じくそこに娘を預けているシングルファーザーで同大学神学講師のモーウンス (Mogens) と出会い、ネストロイ (Nestroy)<sup>4</sup> の喜劇 (komedie) の切符が2枚手に入ったからと言って観劇を誘われる。彼は、「護符 (Talismanen)<sup>5</sup> じゃないんですけどね」とつけ加えることを忘れない。このネストロイの「護符」は、コンスタンティン・コンスタンティウスが『反復』の中で「反復」を実験するためにベルリンへ旅して、帝都劇場で見た演目であった。ヨハネとモーウンスの二人は、これが縁で恋愛関係に入るのだが、観劇の3日後には保育園の娘ナイヤ (Neija) の部屋に『反復』の本が置かれていた。間もなくにして、「キェルケゴールとベルリン」について研究しているというモーウンスはコンスタンティン・コンスタンティウスの語るキェルケゴールの「反復」を否定するのだが、コンスタンティン・コンスタンティウス自身テキストの中で既にこ

のベルリンの「反復」を否定していたのである。モーウンスは否定したが、『反復』の「反復」は『時の赴くままに』の中で生き続ける。

### 3. 『反復』における「反復」

バゲスは、「『反復』は、1843年にキェルケゴールによって書かれた小説 (novelle) である。登場人物は三人。語り手のコンスタンティン・コンスタンティウスと、この語り手が関心を持ちあれこれと気にかけている青年、それにこの青年が恋をしている若い娘、である」(Baggesen: 41) と紹介して、『反復』のストーリーをかなり詳しく記している。本稿冒頭にも記したように、筆者は修士論文において『反復』のストーリーを詳細に追って論じたので、ここではそれを反復せずその概略を記すにとどめ、これに対するバゲスの所論のいくつかを論評したい。

ところで、筆者は、修論において『反復』の内容を便宜上3つのパート(「中ほどの‘反復’の前まで」・「その‘反復’から‘宛名書き’の前まで」・「最後の‘読者への手紙’の部分」)に分けて論じた(久保田: 4)。

初めのパートでは、青年の恋とコンスタンティン・コンスタンティウスのベルリン行が描かれている。発端から追憶の恋に苦しむ青年を助けて「原初の状態への回復」(redintegratio in statum pristium)<sup>6</sup>をもたらしてやることによって、娘との関係に「反復」のお膳立てが出来るとの見通しのもとに、コンスタンティン・コンスタンティウスは青年に一つの陰謀 (intrige) 計画を授ける。娘と適当にぬらりくらりとした (slendrian) 関係を保ちつつ、またこのために雇ったお針子と仲良くすることによって一旦娘との関係を壊せというわけだ。さて、この陰謀話になる前に、コンスタンティン・コンスタンティウスと青年が魚釣り券を持って朝まだきの市の外濠へ朝霧を浴び、露に濡れた草を踏んで出かけて行って語り合うという場面 (SKS 4: 17. *Gjentagelsen*) があるのだが、バゲスがこの密会を二人で陰謀を計画するためとしているのはどうだろうか。この場面の描写には妖気漂う異様な雰囲気を感じられる。コンスタンティン・コンスタンティウスが青年にその陰謀を提案するのは、この密会のあと「またしばらくの時間が過ぎた」(ibid.: 17), 「時間が経った」(ibid.: 18) という経緯があったあとのこと (ibid.: 19) なのである。こうした時間的な乖離からしても、この密会のテーマが当の陰謀であったとは考えられない。バゲスは、この二人の関係を、またコンスタンティン・コンスタンティウスその人を隠れホモセクシャルだと論じている (Baggesen: 115) が、それはこの場面を指してのことではない。筆者は、むしろこの場面こそがホモセクシャル的な関係と見たいが、そう決めつけることも出来ない。

hun drømte dog ikke om, hvad der foregik mellem os. Hvad Under at mennesket blev bleg! Hvad Under at jeg er det, der var hans og flere Lignendes Fortrolige!

(SKS 4: 17. Gjentagelsen)

この下線部分を、筆者は「彼の、そして多くの同病相憐れむ者たちの親密な友であるものだということ」(久保田: 10)と訳したが、筆者の含意するところは、多くの点で同様の性癖と悩みを持つコンスタンティン・コンスタンティウスと青年の間には相互分身関係があるということなのだ。さて、陰謀は青年がいざというときになって逃げてしまったために不発に終わる。青年の姿は消え、ここからコンスタンティン・コンスタンティウスの「反復」探しのベルリン行が描かれる。以前に行ったことのあるベルリンでそのときの経験をなぞってみるが、「反復」は現われず、殊に天才ベックマンが演じるネストロイ劇「護符」にも前回の光はなく散々だった。意気消沈して自宅に帰り着いたが、その自宅も下男による大掃除の真っ最中という様変わり。コンスタンティン・コンスタンティウスは、現実の世界には「反復」などないと結論せざるを得なかった。

次のパートは、コンスタンティン・コンスタンティウスのコメントで始まり、ストックホルムへ逃れて身を養っている青年からのコンスタンティン・コンスタンティウス宛の手紙の披露で構成され、冒頭には改めて「反復」の見出しが付されている。本来の「反復」がここから始まるというサインである。青年の手紙には、彼が旧約聖書のヨブに自己同一化して「反復」を呼ぶ「雷雨」を待ち望む様子が描かれるが、その雷雨が娘の他の男との結婚という形で到来し、青年がそれを逆手にとったかのごとく、元の自由を得た、自分自身を取り戻した、これこそ「反復」であると、歓びを爆発させるところで終わっている。

最後のパートは、コンスタンティン・コンスタンティウスの「ただひとりの親愛なる読者(もちろん、レギーネ・オールスン<sup>7</sup>を含意する)への独白的献辞である。この中で彼は言う。

私が世に出したあの青年、彼は詩人なのです。私にはこれ以上のことは出来ません、というのも私にはせいぜい詩人というものを考えてみて、そこから彼を産み出すというくらいのこと、私自身が詩人になることは出来ませんし、それに私の関心は別のところにあるのですから。私の課題は、自分を純粹に美的に心理学的に関わらせることでした。私は自分でも一役買って出ました。しかし、もしあなたが、私の親愛なる読者よ! もっとよく見てくださるならば、私がただの仕える靈(en tjenende Aand)であり、あの青年が恐れているようなものではないこと、私が彼に無関心でいるのではないというこ

とが容易に分かっていただけるでしょう。 (SKS 4: 93-94. *Gjentagelsen*)

バゲスンは、これをこう説く。

企みは要するに、コンスタンティン・コンスタンティウスがその真の読者に「青年」と書いたのが自分であると信じ込ませようとしたところにある。だがコンスタンティン・コンスタンティウス自らいみじくも言うように、彼は詩人ではない、彼はケルケゴールの小説における語り手なのだ。彼がここで物語を自分のものにしようという〔一役買って出るだけのはずなのだが〕試みは、実際には物語から逃げようとする試みであり、いわば青年から自由になろうとする試みなのだ。だから、読者がもっとよく見ようすると、コンスタンティン・コンスタンティウスが青年に無関心ということからは程遠い存在であることを語り手に対して認めなければならなくなるのだが、一方でコンスタンティン・コンスタンティウスは小説の中では単なる仕える霊にすぎないと読者に対して認めることでますます苦しい立場となる

(Baggesen: 44)

そして、「『反復』は、不幸な恋の物語、言い換えればコンスタンティン・コンスタンティウスの青年への不幸な恋の物語である」(Baggesen: 44) と言って、再び例のホモセクシャル説を持ち出すが、筆者はむしろ自らの分身たる青年との分裂が彼の絶望を深めると解する方が妥当ではないかと考える。コンスタンティン・コンスタンティウスは、青年の詩人性を批判するが、自らも宗教的・超越的な反復を実行出来るようなアルキメデスの点を見出せないでいるのだ。バゲスンは、この章の終わり近くで、この絶望（人生の真実を求めて自己経験しなければならない道筋に待っている絶望）について次のように言う。

それは、言い換えると人生の真実が時間の中にあり、時間は方向と充実 (*retning og fylde*) を持っているということと関わりがある。それはそのまま、コンスタンティン・コンスタンティウスが洞察するのでなく知りたいと絶望的に望んだあらゆる人生の真実に当てはまるが、その中でも最も大きいのが愛である。だが、「反復」はそのことを示して見せるに殊更巧みである。何故なら、反復は時間の流れの中に現われる新しいものであるが、反復はそれ自体の中に時間の充実<sup>8</sup>という古いものを持っているからである。 (Baggesen: 50)

さらに、ヘンレクスの言葉を引用して、次のように注して言う。

私の読みは、他の点ではヘンレクスンと大きく隔たるが、ここのところでは一つに収斂する。ヘンレクスンの (*Kierkegaards Romaner* の) 103 - 104 頁を参照してほしい。そこでヘンレクスンは、「反復」と「時間」の関係について論じ、とりわけこんな魅力的な言い方をしている。即ち、「行動する者だけが時間や人生の流れと同じ方向に向かって動くが、知って追憶する者はいつも現実から思考へと後ろ向きに動く。こういった追憶志向の人間は、魔力の生贄となる・・・」<sup>9</sup> と。  
(Baggesen: 115)

これら二つの引用文は、マスの『時の赴くままに』にも関連する重要なポイントである。バゲセンは、この章を次のようなまとめの文章で締め括る。

だが、この同じ記述の中には〔そして、お分かりだろうがコンスタンティン・コンスタンティウスが内省しつつ書いている人生の実相の中には〕、絶望の反復<sup>10</sup>のエコーとして現われる幸せな反復もある。というのは、この絶望の反復に関連して、「反復」の概念規定そのものが自身の反復を持つからである。これら反復概念の規定は、テキストの推移の中のあるべき場所に現れ、テキストとそれが記述する絶望から多くを得て益々充実して行く。即ち、テキストの中で経過する時間では青年との出会いの前に出てくる叙情的・暗示的な第一番目の規定、それからベルリン行挿話に結びついた哲学的・分析的な規定及び青年の手紙の再現報告に関連して出てくる「超越的なもの」という規定を経て、献辞において展開される「宗教的な」範疇という「反復」の規定へ、という具合に。  
(Baggesen: 51)

#### 4. 『時の赴くままに』における「反復」

『時の赴くままに』の著者スヴェン・オーウ・マスンは、1939年オーフースに生まれ、オーフース大学では数学を専攻し、1963年に『訪問』(*Besøget*)でモダニズム作家としてデビューした。著作活動も多岐に亘る彼は、キェルケゴールを祖とする実存主義哲学やカフカの影響を受けて、この処女作や『追加』(*Tilføjelser* 1967)等を書いた60年代、ポストモダンの相対主義を基本姿勢として『世界の成立』(*Sæt verden er til* 1971)、『中間期の規律と無規律』(*Tugt og utugt i mellemtiden* 1976)を発表して国民的成功を収めた70年代、そしてこの『時の赴くままに』や『人間を語ること』(*At fortælle menneskene* 1989)、『天と地の間に』(*Mellem himmel og jord* 1990)等々のオーフースを舞台にした、それまでに比べてよりリアリスティックで抽象性も低いながら極めてイマジネーションに富む作品を多産した80-90年代を経て現代デンマークの最も重要な作家の一人となった。



ここからは、バゲスンの論考を参照しつつ、スヴェン・オーウ・マスンの『時の赴くままに』を追い<sup>11</sup>、コメントを加えることにする。

#### 4.1. ヤイデの企み

本稿3ページに記したように、モーウンスは子供たちを預けている保育園でヨハネを誘う。

「— ネストロイの喜劇ですよ、別れ際に彼は言った.— でもタリスマン（護符）じゃないんです！」  
(Madsen: 23)

この場面がもう一度出てくる。

「— ネストロイの笑劇ですよ、タリスマンじゃないんですけどね、と彼はつけ加えた」  
(Madsen: 42)

42 ページでは、23 ページの「喜劇」(komedie) が正しく「笑劇」(posse)<sup>12</sup> と直されているが、この前後の文章もかなり違っている。ここはまさしくキェルケゴールの『反復』を暗示しているのだが、ヨハネには通じていない。面白いのは、この二つのよく似てはいるが同一とは言えない場面が両方とも「1985年の10月7日、月曜日」に現われるということである。これはどういうことだろうか。あとで分かることだが、この月末の10月30日に最初の時間うしろ跳びの実験が行なわれることが関係している。

マスンの『時の赴くままに』は、この10月30日の嵐の夕方(但し、第2章の10月30日の夕方は「風はそよりともしなかった」とある)、ヤイデ教授がムンゲ通り (Munkegade) の家々を「まえに私を見かけませんでしたか？」と尋ねて回る印象深い描写で始まる。『時の赴くままに』のストーリーを説明することはかなり難しい。キェルケゴールの『反復』にも行きつ戻りつの錯綜した言説が反復され、時間の順序を無視したエピソードが溢れていたが、この『時の赴くままに』の叙述はそれを遙かに越えているからだ。なにしろ4ヶ月半という期間をカバーする物語全編(全195ページ)にほぼ100の日付が前後・反復して現われ、その時々々の出来事を告げるという繁雑さだ。この10月30日などは4章にわたって前後8回も登場する。バゲスンも、そのストーリーを簡単に説明しているが、未読の人間には到底伝わらないだろう。筆者は、全10章の物語を章ごと・日付ごとに出来事を記入して6枚の表にしてみたので、それを参考にしながら主として『反復』及び「反復」に関わるストーリー(このテキストには元々ストーリーは無く、ある

のはプロットだけと言うのが正しいのだろうが) だけを追いかけてみたい。

主な登場人物は、オーフース大学<sup>13</sup>の時間物理学者 (kronofysiker) ヤイデ (Jeyde) 教授, 同大学の物理学研究所で専任講師を務めるヨハネ (Johanne), 同じく同大学神学教室の講師でヨハンネの恋人モーウンス (Mogens), 同大学新入生のスヴェアア (Sverre), リーススコウ (Risskov) にある国立病院の精神病医 Dr. モニケ (Monikke), ヨハンネの同窓の友で西海岸のレンクービング (Ringkøbing) のギムナジウムで働いているカリーナ (Karina) といったところ。テキストのスタートは、上に述べた 10 月 30 日の情景であるが、時間的に見た物語の発端は 9 月 13 日 (金) にオーフースのフェストウーエン (festugen)<sup>14</sup> のガムレ・ビュー (Den gamle by)<sup>15</sup> でヨハネが吸い寄せられるようにしてヤイデ教授と出会い、時間論を交わす場面にある。このとき、ヤイデは自分に突き当たり (støde) かけたヨハネに「ここでこんな古いぼれ (gammel støder) がいて驚いただろ」と軽口を飛ばす。彼が 57 歳だと聞いてヨハネは、自分の歳 (30), 連れて来ている娘ナイヤ (Neija) の歳 (5) を頭に浮かべて、来月の 31 歳の誕生日 (ヤイデもプレゼントを考えている) には自分の歳を中にして 3 人の歳がシンメトリーを構成することを密かに喜んでいる。「彼女は、物事が秩序立っていることを好んだ」、「シンメトリーは、人生のちょっとした喜びだった」(Madsen: 12) と説明が入る。そのヨハネにヤイデが「わしは、ここで落雷 (lynedslag) を待っていたのだよ」と語りかけるのは意味深長である。これは、キェルケゴールの『反復』において青年がヨブに倣って待っていた雷を暗示していると考えて間違いないであろう。そのあとヤイデは、アインシュタイン (Albert Einstein 独・米 1879-1955)<sup>16</sup>・エディントン (Sir Arthur Stanley Eddington 英 1882-1944)・ゲーデル (Kurt Gödel 奥・米 1906-78) の相対性原理や数学に言及しながら、また名前は挙げられていないが、おそらく量子力学のボーア (Niels Henrik David Bohr 丁 1885-1962) をも頭に入れながら、時間=情報=エネルギー=質量であること、時間が隙間のない量子<sup>17</sup> からできていること、その時間量子は、空っぽのスペース (tidsrum) に囲まれていて、互いに置き換わりをしているが、極めて短い間隔で行なわれるため安定し連続して存在しているように見えること、そして時間量子 (tidskvant) の 1 単位 (et sæt) が 10 の 23 乗分の 1 というサイズであること等を説く。ここに見る限り、ヤイデは優秀な学者で、ユーモアのある親切な男でもあり、ヨハネは几帳面な性格の優秀な研究者、娘を大事に育てている母親であることが分かる。ヤイデが待っていた雷とは何だったのか。時間についての新しい理論か、それともそれにヒントをくれそうなヨハネか。続いて、二つ目の『反復』へのほのめかしが描かれる。ナイヤがそばの小川へ小石を投げ入れて遊んでいる。川に水の流れが無いように見えるので、繰り返す同じ川に新しい石を。バゲスンも、

直接的にはこれはもちろんヘラクレイトス<sup>18</sup>をほのめかすものだし、間接的にはこれによって『反復』をほのめかしているのだ [そして、2ページ先では当然のごとくゼノン<sup>19</sup>が顔を見せる]。  
(Baggesen: 53)

と書いている。

テキストの第1章<sup>20</sup>は、前述したように10月30日のヤイデの彷徨で始まり、彼のあとをつけて行ったヨハネが研究室でのヤイデの怪しげな振る舞いを遠望して硬直するところで終わっているが、10月30日はまだまだ終わらない。

第2章では、ヨハネとスヴェアアとの出会い(相対性理論の授業中の教室で)及び先に触れたモーウンスとの出会いがある。いずれも10月7日のことである。授業のあと、ヨハネはヤイデに会い、9月13日の続きの議論をする。ヨハネが次のようなことを言うと、ヤイデが深い関心を示す。

世界が一瞬のうちにしか存在せず、大部分のあいだ存在しないのは、実際の世界が4次元だから。3次元視点の私たちには物事の痕跡しか見えない。すべての物が規則的に揺れながら消えたり現われたりしているということ。揺れている振り子を鍵穴から観察しなければならない時と同じだわ。

(Madsen: 22)

10月7日このあとの出来事は、第3章でも描かれ、しかも少しずつ中身がずれている。いずれも、10月30日の実験の影響らしい。ヨハネとモーウンスは第2章では観劇のあと、彼の家に戻ってソファでのセックスに及ぶが、第3章ではその機会を逸する。また第3章では観劇のあと、モーウンスからケルケゴールのベルリン行の話を退屈そうに聴き、18日には電話で、モーウンスに貸してもらった『反復』をこき下ろす。「ごちゃごちゃしていて役にも立たず面白くもないこんな本は読んだことがない」(Madsen: 45)と。そのあとモーウンスの運転で子供たちやカーリーナも乗せて西海岸へ遊びに行くのだが、その車中でモーウンスは、『反復』を再読した結果「あれは反復には当たらない」(Madsen: 46)と切って捨てる。しかし、その否定の根拠は必ずしもどこか全く明白ではない。ケルケゴールのベルリン行研究者のモーウンスは、そのベルリン問題に関して「反復」を否定したつもりかもしれないが、そのことは前述したようにコンスタンティン・コンスタンティウス自身がテキストの中で否定しているのだから何の妙味もない。かといって、ケルケゴールやバゲスンが論じるような『反復』の深い解釈を云々しているわけでもない。好きになったヨハネに安易に合わせたとしか考えられない。「語り手」と「書き手」を峻別するバゲスンなら、語り手のコンスタンティン・

コンスタンティウスが否定しようと、書き手のキェルケゴールはどう考えるか分からぬとでも言うのだろうか。『時の赴くままに』の3人称の語り手は、モーウンスに否定させているのである。だが、バゲスは言う。

彼女がキェルケゴールの『反復』を46ページにして捨ててしまったのは時宜を得ていたということだろうか。いずれにしろ、マスンにとってはそうではないというのが私の見解である。  
(Baggesen: 41)

ヨハネは、10月20日に31歳の誕生パーティーを開く。この様子もディテールをかなり違えて第2章と第3章双方に描かれる。このパーティーには先に紹介した登場人物がスヴェアアを除いて全員（但し、モニケ医師は第3章のみ）が出席している。ヤイデは、第2章のパーティーでは未視感 (forudanelse 予感) や追憶 (erindring) について語り（これも、『反復』へのほのめかし）、1秒間に24回まばたきをする人は、この速度で映像を流す映画を観ても真っ黒なスクリーンしか見えないというまばたき病 (blinkesyg) を紹介して、極小の量子の明・滅が時間ひいては世界の存在・非存在に対応していると話す。しかし、第3章のパーティーではヨハンネに実験の「問題点」について話し、モーウンスやモニケからアドバイスを受けている。

第2章に戻るが、この章の10月30日にはヤイデがヨハネと学食で9月13日の続きを話している。ヤイデは、光速( $3 \times 10^{11}$  乗 mm/秒)との相対性から時間の収縮・間延びを説き、更に時間量子をしかるべきところ (det pågældende sted) で切断すればその量子が圧縮され、膨張するまでの時間が消去されて、人間にとれば時間がうしろ跳び (tilbagespring) することになるという理論を発見した、と言う。ヨハネの「それはどれくらい?」という質問に答えて、ヤイデは相対性原理からして  $2 \times 10^{29}$  乗 sæt 秒だから、前に言った 1 sæt =  $10^{23}$  乗分の 1 を考慮すると、それは200万秒になり、結果23日の時間収縮即ち後戻りになると言う。二人は研究室に戻り、時間量子切断のための「しかるべきところ」について、鞍点 (sadelpunkt) という概念を持ち出し、ヤイデはそれが「パーペター・ディメンションが最小に、ヴァーダンディ・ディメンションが最大になる点」(et sadelpunkt, hvor Perpeter-dimensionen er i minimum, og Verdandi i maximum)<sup>21</sup> だと解説する。このあたり一連のヤイデ講釈は、最も SF らしい場面なのだろうが、それが S なのか、F なのか、かなり曖昧である。バゲスも、これらについては一言も語っていない。第2章はこのあと、完璧ではないとヤイデの言う初めてのうしろ跳び実験のスイッチを押してしまうところで終わる。理論はそれなりに緻密に見えるのだが、実際のうしろ跳び実験のプロセスや技法については描かれない。コン

ピューターと時間チューブ (tidsrør) とナイフスイッチ (knivafbryder) での電流操作、それだけである。ともあれ、この10月30日からうしろへ戻った10月7日からの23日間の過去の出来事は消去されたことになる。第2・3章の10月7日のkomedie/posseに関する出来事の反復と差異、10月20日の出来事の反復と差異、さらにはここには書かなかったが10月21日のそれ(帰り道でのヨハネの怪我の有無)も、この10月30日の実験による影響ということになるのだろうか。

第3章の誕生日パーティーでは上に記したように、この実験の問題点がヤイデから提出され、モーウンスのアドバイスも受けて、モニケと心の刻印 (prægning af sindet) 論について議論を交わす。ヤイデの言う問題点とは、うしろ跳びの実験が成功しても、人はいつ時間が切断され、どこまで後戻りし、その間何が起こったかが思い出せないような不確実性 (uvished) の中で生きていくのは無意味ではないかということであった。第2章の10月30日に不完全と知りつつ実験が行なわれ、その不完全性を補うための議論が第3章の10月20日に行なわれている奇怪さ、これこそが時間うしろ跳びの効果であり面白さであろう。

10月30日の記述は、第3章にも引き継がれる。ヤイデとヨハネは学食でコーヒーを飲みながら歓談している。風邪で1週間引きこもっていたヤイデが出校してきて、上機嫌でヨハネを自宅へ招待しようと思っている、などと話す。その後またヤイデは姿を見せなくなり、ヨハネも風邪の再発だろうと電話も遠慮している。この間に、ヨハネとモーウンスの仲が怪しくなる。モーウンスが趣味にしている偽絵画収集の件で口論したり、彼の態度が急に横柄で傲慢になったので、ヨハネは嫌気がさし、11月4日には次のデートの約束もせずに別れる。

11月20日久しぶりに出校してきたヤイデが、当の研究が進んだので見せたいと言って強引にヨハネを自宅へ連れて行く。小高い木々に囲まれた大きな古びた屋敷の薄暗い地下室、ヤイデは不意にヨハネを襲い、クロロホルムを嗅がせ、猿轡をかませ、寝台に乗せて手足を拘束し、彼女の心 (sind) に深く傷をつける手術を行なう。続けて、この事実や痛みを記憶を消去するための暴力的な施術も。第3章は、地下の暗い空間にこだまするヨハネの絶叫で終わる。

ただ、心にトラウマ<sup>22</sup> 的な痕跡が残るだけだ、通り過ぎるときに必ずその場所が分かるように時間の流れの中にシルシを付けたということだよ、とこの狂った男は言った。  
(Madsen: 58)

バゲスン流に言えば、「思い出すことは出来ないが、気づかずに通り過ぎることは出来なくなるという傷」(Baggesen: 52) だ。このおぞましいシーンこそ、怪奇SFの真骨頂というところだろう。優秀な時間物理学者ヤイデは、もう一方では世に

も恐ろしい怪物であった。まさに、ジキル博士やフランケンシュタイン博士を彷彿とさせる。イェンスン (Thorbjørn H. Jensen) とボンズゴー (J. Bundsgaard) が興味深いことを述べている。即ち、

Jeyde (ヤイデ) という名は、もちろん Je(kyll)と(H)yde を短縮したものだ。つまりヤイデは、単に科学者 (videnskabsmand) であるばかりでなく、怪物 (uhyre) でもあるのだ。読者自身、彼がジキル博士とハイド氏のどちらにより近いのか決めることが出来る。  
(Jensen & Bundsgaard: 12)

こうしてヨハネは、うしろ跳びの 23 日間を見分けることが出来るようになったが、それは苦しみの連続を反復することでもあった。心の傷は幻のようにヨハネを襲う。第 4 章にも引き継がれる 10 月 30 日には学食で不意に倒れ、ヤイデに頼まれたモーウンスによってモニケのもとに運ばれる。以後、ヨハネはモニケの患者となり対話・散歩セラピーとでも言うべき治療を受け、世界の裂け目に目を覆うための薬を処方されることとなる。先に触れたモーウンスとの恋愛も順調には進まない。11 月に入って暫く (10/31~11/20) はうしろ跳びの影響を受けない日々が続いているはずなのだが、上旬には日付を違えて行なわれるヨハネのモーウンス宅訪問をいずれも「初めて」の訪問とするなど第 3・4 章で噛み合わない記述が行なわれる。テキストは、うしろ跳びによる反復(やり直し)のみならず、つじつまの合わぬ叙述をして異様な雰囲気醸し出しているように見える。11 月 9 日には、ヨハネとモーウンスが彼の女性関係について話し合い、モーウンスがカーリーナにも接近していたことや彼が手当たり次第に女性を追うドン・ファンであることを知る。バゲセンは、

「― 結局、僕は君に対して傲慢に振舞おうと決めたんだ。尊大で独りよがりな態度をとって、君が我慢できなくなって僕を見捨てるようにね。君がやり易くなるようにだ。

― そして、あなたはますます本性をあらわした。ところが腹立たしいことに、私はあなたを苛立たせるためにすべてを鵜呑みにしたってわけ？

― ちがう、僕にはそんなつもりはなかった。僕は、君に見捨てられることなど望んでなかったことに気がついたのさ・・・」  
(Madsen: 70-71)

を引いて、これは『反復』におけるあの陰謀の変形された再話だと言っている (Baggesen: 54) が筆者も同感である。パロディーと言ってもよい。11 月 26・27 日～12 月 19・20 日には、またヨハネにとって第 3・4 章での食い違いや妄想(夢に

うなされる、ヤイデの介入、人格の分裂)が起こり、12月19・20日にうしろ跳び実験が行なわれたことを予想させる。その間、ヨハネは同僚のジョージ(George)と浮気したり、ヤイデと議論したり(12月2日)。そして、繰り返される実験に嫌気がさし、何の効果があるのかと追及するヨハネに、ヤイデは適切にマネージすれば人類の進歩になると答えて、次のように言う。

「・・・世界は次第に一層複雑になってきて、自分たちの行為の結果が見通せなくなっている。だから、その代わりに自分たちの行為を徹底的に試さなければ、いわばシナリオとか実験の舞台を生き抜いて行かなければならない。その結果を生き抜いたならば、そのあと正しい道を選ぶことが出来るのだ」

(Madsen: 91)

12月3日にはモニケに勧められて人生の整理 (oprydning) を行なおうとする。整理の第1段階は、カーリーナに会ってモーウンスとの決別を告げること、第2段階はモーウンスと直接会って別れを言うことだった。12月19日には、ヤイデとともに2回目のうしろ跳び実験に立会うが、例の「問題点」を語るヨハネにヤイデは

「君の心は開かれたのだよ。君が経験することは君の現在の記憶に刻印されるだけでなく、もっと深い層へと届いているのだ。それは、あたかも過去のことであるかのように蓄積される。脳にはそれくらい大きなキャパシティがあるのだ」

(Madsen: 80)

と説明し、これはモニケも承知のことだと説得されているうちに実験のスイッチが入る(第4章の終わり)。

翌20日、いよいよヤイデを排除して責任をとらせることが焦眉の急だと感じていたヨハネは、一計を案じて実験に誘い、時間チューブ (tidsrør) を隠してヤイデをギムナジウムへ探しに行かせ、警察を呼んでおいて、戻ってきたヤイデを逮捕させる。だが、そうこうしているうちにスイッチが入ってしまう(第5章)。かくて、うしろ跳び実験の実権はヤイデからヨハネに移行する。バゲセンは、これに関して「キェルケゴールの小説における青年と娘の間にあった経緯の変形された再話をみることが出来るだろう」(Baggesen: 54) と言っているが、ややこじつけの感がある。『反復』では娘も経緯もほとんど表に現われなかったのだから。他方で、これを『反復』の青年が第2のパートの『反復』でテクストをコンスタンティン・コンスタンティウスから引き継いだことに重ねていること (Baggesen: 55) には、ある意味同意するが、語り手と語られる中身の関係を考えると、やや

次元の違う話ではないかと考えられる。形式的にも、手紙を披露しているのは青年自身ではなく、あくまでコンスタンティン・コンスタンティウスなのだから。第5章はなお続き、ヨハネはモーウンスの自動車事故死の報を受けて、カーリーナとともにその埋葬式に出席する。彼女はそれほど悲しんでいるようにも見えず、年末の1週間をカーリーナのところで過ごす。新年(1986年)からは春学期の授業準備に専念するが、1月27日にはモニケからヤイデが明日にも退院するとの情報を得て、次の鞍点が近づくと研究所へ向かう(第5章の終わり)。

#### 4.2. ヨハネの狂奔

実験を掌握したヨハネは、一方でヤイデの退院(ヤイデは、警察から国立病院へ移送されて今はモニケの管理下にある)を遅らせて復権を妨げるようにうしろ跳びを重ね、他方でモーウンス亡きあとの孤独を埋めるかのように、若いスヴェアアとの恋のアバンチュールにうつつを抜かす。心に傷を受けた代償に、うしろ跳びによる状況変化に対応し、望ましい状況を反復し得る能力を得たヨハネはそれをスヴェアアとの恋にも活用するが、必ずしもうまくいくとは限らない。第6・7・8章には、そのスヴェアアとの絡みを中心にした物語が並行して描かれる。ヨハネがうしろ跳びの影響を受けて、自分が二人になったような感覚に悩んだ1月4日のあと、田舎の親元でクリスマス・新年を過ごして戻ってきたスヴェアアを駅に迎える1月6日のシーンがこれら3章に少しずつ違えて3回反復して現われる。第6章では、スヴェアアの下宿を訪れ、また自分の家へ呼び、ヨハネが未熟なスヴェアアをエロチックに、ほとんどサディスティックに弄ぶ。長い陶酔の日々を経た1月27日、ベッドの中にいた二人はモニケからのヤイデ情報を得て、ウォークマンのイヤホンをつ互いの耳に繋いだまま研究所へ向かう(上記1月27日とのずれがある)。ヨハネは、「さようなら、愛しいひと、また会おうね。もう一度知り合えるのを楽しみに」(Madsen: 122)と言って、実験のスイッチを入れる。1月4日の23日後のことである。(第6章の終わり)。

第7章の1月6日では、田舎から戻ったスヴェアアがイヤホンから聞こえてくるヨハネの囁きに誘われ導かれて彼女の部屋へ辿りつくまでの道程がロマンチックに描かれる。そのあとヨハネの家へ引越したスヴェアアとこの1月の間をゲームのように戯れ、また物語作りをして過ごす。だが、1月29日、突然スヴェアアは置手紙を残して消える。ヨハネの家には、「不死の女神ようになったヨハネにはとてもつき合えない」、自分の下宿には「現実が追いついてくるまで、僕は走り続けなければならない」と書き残して(Madsen: 138)。ヨハネは、必死に追いかけるが諦めて研究所へ向かい、感乱の中でうしろ跳びの時刻を自動的に決定するプログラムのスイッチを押す(第7章の終わり)。1月6日の23日後のことである。



第8章では、1月6日の記事の前に、12月末の記述がいくつか並ぶ。ヨハネは、カリーナと西海岸に遊び(第5章の最終部と繋がる)、モーウンスを偲ぶカリーナに同調しながらも、間もなく会えるスヴェアアに心を奪われている。また、犬の散歩をさせていたラスムスン (Rasmussen) という男と知り合い、彼の奇特的な趣味について話を聴く。この12月21日から1月3日までは、うしろ跳びの影響から外れた期間のはずだが、ヨハネが公園で樺の木を抱き締めるなど妙なことも起こる。さて1月6日だが、スヴェアアを駅に迎えたヨハネと一緒にレコードを聴いたあと、翌日のコンサートに誘う。コンサートに否定的な一家言を持つスヴェアアも折れて出かけ、そのあとの居酒屋にもいやいや従ったスヴェアアは更にヨハネの家まで送って行き、ワインを振舞われて最後はキスと愛撫の嵐となる。1月10日には、二人はモーセリスボースコウ (Morselisborgskov) へ遠出し、清新の気を養った。その後の日々、ヨハネは恍惚と無関心のバランスをとろうと考えたり、概観と接近視の関係を思索したり、ナイヤに保育園で「私のパパは誰？」と訊かれて「ギリシアの神よ」と答えたり、魅力的なレストランに一人であるいはスヴェアアやジョーチュと通うようになり、ジョーチュとは肉体関係も結ぶ。スヴェアアが嫉妬して悲しんだら、うしろ跳びで救えばいい、などと自分勝手に考えている。第6・7章で二人が蜜月を過ごしていたその同じ頃に、ヨハネは第8章ではジョーチュと浮気をし、第9章ではスヴェアアが田舎で大晦日に村の娘との恋を始めたことを知り、歳の差を思い知らされたりしている。これら4章をここまで見てくると、ヨハネの人となりもかなりよく見えてくるだろう。

マスンは、別の「オーフースもの」の中でもヨハネという名前の女性を登場させているようだが、本稿での『反復』との関係を意識するとすぐ思い出されるのがキェルケゴールの好んで用いた仮名「ヨハネス」である。たとえば『おそれとおののき』の仮名著者「沈黙のヨハネス」(Johannes de silentio) のヨハネスなどは、グリム童話の「忠臣ヨハネス」から採られたという説が有力らしい(梶田1962:297)が、他の作品の場合はどうなのだろう。たとえば『あれかこれか』(1843)所収の「誘惑者の日記」に登場する誘惑者ヨハネス。各国語でそれぞれの発音がなされるが、すべて元々は洗礼者ヨハネからきていると見て差し支えないだろう。洗礼者ヨハネも、神に心を向けるよう人々に求め、その回心の証しとしての洗礼を施したのであって、いわば神への誘惑者だったのではないか。各国で発音も綴りも異なるが、Johannes (ヨハネス、ハンス、ヨハン: ドイツ語。ヨハンネス: ラテン語), Juan (フアン: スペイン語), Jan (ヤン: デンマーク語など), Giovanni (ジョヴァンニ: イタリア語), すべて同類である。したがって、ドン・フアンのフアンも、ヨハン・ファウストのヨハンも同じであり、彼ら誘惑者には文字通りぴったりの名前だと言えよう。『時の赴くままに』のヒロインのヨハネもご多分に

漏れないのではないか。彼女も誘惑者であり、そのことはここまでの経緯からも明らかである。先に挙げたイェンスンとボンズゴーは、彼女の姓が Fraser であることから、まさしく Johanne(s) F(orførelsen) だとして、好色に目が眩んで自由を失った女性だと断罪し、更にこんなことを言っている。

frase というのは、音楽では楽句(4小節からなる最小の楽節・・・筆者注)で、自ら以外との交流のない閉じこもった楽章のこと、この類推で言うと、ヨハネはハイデガーのダス・マン (das Man) やキェルケゴールの俗物 (spidsborger) のように閉じられたシステム・人生に囚われていると見てとれる。日常用語でも frase は空虚な言葉、きまり文句であり、共通意識にある非合理的な先入観や始まったばかりで採択された規準を深く考えないで使用する。また Fraser は、fra-ser でもあり、彼女はやろうと思えば得られる洞察力を ser bort fra (無視)して、安易な解決しか選択しない

(Jensen & Bundsgaard: 12).

マスンがここまで考えて命名したのかどうかは判然としない。興味深い見方ではあるが、やや牽強附会が過ぎるとも言えよう。たしかにヨハネは誘惑者である。それには同調するところはあるが、およそ誘惑というものは双方向的なものであろうというのが筆者の考えである。モーウンスにも、スヴェアアにもヨハネを誘惑する意思と言動もあった。さらには、ヨハネの人生観や行動に対する二人の見解は、言葉のこじつけに乗じて過度に厳しくなされているように見える。過去の言動を修正出来るものならしたい、過ぎ去った人生をやり直せるならやり直してみたい、というのはヨハネに限らず人間なら誰もが持つ願望であり無下に否定することは出来ない。なお、彼らがこのあと、ヨハネの誘惑者ぶりをドン・フアン的(ファウスト的ではなく)としていることには同意する。直接的な好色から短期間に3人を誘惑しているからだ。また、彼女が上に見たように、スヴェアアが嫉妬に苦しんだら、うしろ跳びで救ってやればいい、と考えていることと関係があるのだろうが、彼らが「ヨハネは時間実験の装置で、事故死したモーウンスを救ってやる事が出来たのに、彼女は利己的に目前の解決を選んで、スヴェアアを誘惑する」(Jensen & Bundsgaard: 13) と述べている。このあたりのことは、のちにもう一度考えてみたい。

いずれにしろ、実験の実権を握ったヨハネは怖いものなしのようである。そんな中で彼女は二つの不思議な出来事に出会う。一つは、前に触れたラスムスンとのエピソード。彼とは何度も会って彼の趣味について歓談していたのだが、1月21日に会ったとき異変が起こる。彼は、ヨハネを見かけたことはあるが、挨拶さ

えしたことがない、と不審極まる目で彼女を見つめたのだ。「彼らが会った事実は彼の記憶から消されていた」(Madsen: 173) とある(第9章)。これをどう考えればいいのか。

もう一つは、メデ (Mette) という娘との邂逅である。1月の半ば、ヨハネはバス停の待合室にペンキで落書きをしていたヒッピー娘に会って興味を持ち、家に連れて帰って提案する。月末にもう一度会って金の行方を報告してくれることを条件に 12000kr. を与えた(第8章)。同じ頃、ヨハネはもう一度会いたいと思って何度かバス停あたりへ行って見たが、彼女が関心を持った落書きは痕跡として残っていたが、メデはどこか遠いところへ消えてしまっていた(第9章)。

これら二つの不思議は、このあとに行なわれた3回(1/27・1/29・2/2)に及ぶうしろ跳びの結果だろうか。実は、この2月2日(日)ヨハネはメデを訪ねて行く(行った?)のだ。約束の期間が過ぎたからだ。お気に入りのワインを携えて、怪しげな貧民街へ。バックビルの3階に彼女の名前が書かれた部屋を見つけて入って行くが、うしろからつけてきていたらしい狂人の大男に襲われ、首を絞められそうになるのをワインの瓶で殴りつけて逃げ出し、タクシーを拾って研究所へ。実験室に入ると、そこには何故かスヴェアアがいた。ヨハネの手からは出血していた。パニック状態の中で2秒後にナイフスイッチが下りる(第8章の終わり)。

先に見たように、この23日前の1月10日ヨハネとスヴェアアはモーセリスボースコウへ遠出したのだったが、戻ってくるとヨハネは手から出血していた。13日には、ヨハネは国立病院を訪れて、ヤイデの入院患者仲間から情報収集を試みている。自分を襲った大男やいわくありげだったタクシーの運転手がヤイデに雇われた刺客ではと疑っていたからだ。メデをバス停へ探しに行ったのもこの頃だったし、20日すぎにはあの貧民街へも足を伸ばしている。またこの頃にはしばしば狂人の大男に襲われる夢を見てうなされる。ある時は、死んだ大男が手をヒラヒラさせて挨拶しながら接近してくる幻影を見て、卒倒しかける。語り手は, En hilsen fra manden hun skulle dræbe om et par uger. (2週間後に彼女が殺すことになる男からの挨拶)と説明を入れる (Madsen: 174)。殺害は2月2日のことであるから、不正確であることは免れない。何故なら、倒れかけたヨハネを抱きとめたのはモニケ、気がつく二人は何もない白い部屋でテーブルを前に腰掛けて向かい合っていた。1月29日だった、とあるからだ。2週間というのは、2-3日の誤りだろうか。それとも、この記述は直前の1月21~28日に属するのだろうか。

相次ぐうしろ跳びによる混乱、「世界が定着しておらず、スクリーン上の映画が映像と暗闇の間を行き来しているのと同じように存在と非存在の間で明滅しているという眩暈を起こさせるような考え」(Madsen: 193-4)、実際の幻覚、現実の恋の不首尾等々に疲れたヨハネが自らうしろ跳び中止の決心をすると、すべてが

終息して行った。彼女は、人生に、ナイヤに別れを告げようとする。反復の渦巻きから抜け出すにはヤイデを殺し、自らも命を断つしかない。ヨハネは、身の回りの整理をして、パンナイフをコートにしおぼせ、この世で見る世界の最後の風景の中を国立病院へと急ぐ。病棟に侵入してヤイデを訪ね、二人きりになるのを待って、ナイフで二突き、続けて自分にも二突き。1月31日のことである。(第9章の終わり)

#### 4.3. スヴェアアの介入

最終第10章は、語り手による死後のヨハネに降りかかる連続的なうしろ跳びの回想ないし解説である。バゲスンも言うように、これはケルケゴールの『反復』における第3のパート「読者への手紙」に相当するものである。死んだヨハネは、1月29日をスタートにしてうしろ跳びを反復して行く。23日ごとに痙攣を起こし、痙攣を起こすごとにその23日目の日の出来事を思い出す。1/29(モニケがスヴェアアを伴って部屋に入ってくる)→1/6(スヴェアアを迎えた駅の情景)→12/14(モーウンスがカーリーナを訪ねていた)→11/21(森の小川の橋の上でモニケと世界像の話)→10/29(一人で学食のオープンサンド)→10/6(ナイヤと入浴してしりもち)という具合に。この回想の中で、ヨハネはこれらのうしろ跳びを連鎖にしたのがスヴェアアであることにはっきりと思い当たる。自分とヤイデは既に死んでいたのだから実行不可能だ、とも。(スヴェアアが犯人と考えられる状況証拠はいくつもある。即ち、何度かここぞというときに近くでスヴェアアらしい影や姿を目にしている。2/2に実験室へ戻ったとき彼がいて、実験を手伝った。スヴェアアは、大して親しくもないヤイデを見舞っていた。ヤイデが盗るものとしてない自宅に泥棒が入ったと言っていたことがある)。またヨハネは、自分がスヴェアアに語り聞かせた物語も彼がイヤホンで聞いたという彼女の囁きも、すべて彼の自作自演であり、自分はその物語の中の人物にすぎなかったのではないかと思ひ知る。スヴェアアは、ヨハネがヤイデから奪い取った実験の実権をヨハネから再奪取したのだ。ヨハネの推測は当たっているようだが、何故スヴェアアはこんなことをしたのか。ヨハネの言うように、彼も心を病んでいたのだろうか。ヨハネと蜜月中だったスヴェアアは自らが書こうとしているロマンに関して言っている。

どんな人生も見つかったことがなかった、・・・あったのは引き裂かれた分、引き裂かれた時間、引き裂かれた日、そして人間はこの一瞬から次の一瞬へと続けて見るということが出来ない。物語が書かれてはじめて時間が繋がって意味を持つようになり、そこに人生が現われるんだ。<sup>23</sup> (Madsen: 133)

これは、これ自体一つの特異な世界観ではあるが、この文学的思考と物理学徒としての関心が結びついたとき、うしろ跳びの連鎖を起こすことになったのであろう。ではスヴェアアは、いつ連鎖のスイッチを押したのだろうか。これは大いなる謎である。ヨハネが1月31日の自殺直後に「自分とヤイデは既に死んでいたのだから」と言っている (Madsen: 191) のが間違いでなければ、スヴェアアの実行は1月31日以降のこととなる。だが、もしそうだとするならば、彼女はスヴェアアの実験によって生き返り、死んではいなかったことになる。これでは二律背反である。だが、1月31日に自殺して、生き(返っ)て2月2日に殺人を含む冒険を可能にするよううしろ跳び実験日がただ一つ考えられる。スヴェアアは2月1日に戻ってきて、単発型のスイッチを押したのだ。1月31日直後の時点では自分が死んでいると思っていたヨハネは、スヴェアアのこの翌2月1日のスイッチオンによって生き返り、2月2日の冒険をすることになる。さらに、この2月2日の冒険の直後にヨハネが自ら考案した「うしろ跳びの時刻を自動的に決定するプログラム」をスヴェアアに手伝わせようとしたときに、彼女のパニック状態をいいことに密かに彼の考案した改良連続型のスイッチを押させたのではないか。この実験によってヨハネは1月29日からの回想を重ねて行く(実際には、1/31の死から2/1のスイッチオンまでの間に回想している)とともに、1月31日の殺人・自殺からも2月2日の殺人からも免責されたというわけだ。

さて、回想は、最後(?)の大きな痙攣へと至る。ヨハネが屋台のコーヒーをこぼして手に火傷をする。アコーディオンの音色、メリーゴーランドの音楽が聞こえる。ナイヤがパン屑を川へ投げ込んでいる。一瞬前には止まっていた川の水が流れている。9月13日(金曜日!)のガムレ・ビューだ。このシーンはヨハネが見た一炊の夢ではないかと思まがうほどである。なにしろ、4ヶ月半という時間が消されたのだから。夢だと考えると、諸々の不可思議に溢れたこの物語が逆説的にリアリティーを帯びてくるようにも思えるのだが……。

一人の新入生が近づいてきてナイヤにイヤホンを貸してやろうとする。「危ない、ダメ!」と叫んでヨハネが倒れる。テキストは、次の文章で終わる。

ガラガラと音をたてて回るメリーゴーランド。彼女の上に屈み込む見知らぬ男。「そのままじっと! 私の名はモニケ、医者だ、どうした?」。不思議な理解しがたいイメージ。轟音を上げて駅に入ってくる列車、これは嘘じゃない。床に二つの死体、一人はヨハネ自身。火傷の手にシャワーからの水。下方深くでゴボゴボと小川の流れる橋。「すぐよくなるよ」、若者の肩に手を置いて戸口に立つ医師。真っ暗な部屋。ナイヤの息づかい。 (Madsen: 195)

こうして物語は、それが始まった場所・日時へ戻って終わる。このような結末を何と呼べばいいのだろうか。閉じられた終わり？ 開かれた終わり？ どちらでもあり、どちらでもないような結末である。およそ「結末」ではないのではないか。いわゆる結末が冒頭部に繋がって円環をなしていると言えれば分かり易くもあるが、厳密に言えばそうとも言えない。冒頭に出てきた停止した小川は、結末では流れだしている。ヨハネも元のヨハネではない。小さな差異は無視しよう。問題は、ここから物語がどう動くか、である。大きく言えば、再び同じ道へと引き返して永劫回帰の虚無へと進むのか、過去と現在を包み込んで永遠的な未来を志向する真の反復へと進むのか、それらはキェルケゴール的に言えばヨハネたちの実存としての今後の生き方にかかっているのではないだろうか。

バグセンは、次の最終章「道徳と文明批評」において、ヨハネの計画は、「自分の人生を自由に支配せんがため、時間と自らの体験を思い通りにしようという一種の解放計画なのだ。そして、彼女がスヴェアアに試みる実験は、その意味ではその計画の集約された中身を具体的な形にしようとしての小説の脚色 (romanens dramatisering) にすぎない」(Baggesen: 23) と断じ、一方ヤイデの計画を本稿 13 ページの引用文を用いて「啓蒙運動」(oplysningens projekt) と名づけて批評し、次のように言っている。ただし適切なコメントであろう。

道徳として、『時の赴くままに』がヨハネを通して語るのは、現代の生活に見られる優れて計算的なもの (det suverænt kalkulatoriske) への警告である。ヤイデ教授を通して語るのは、科学への警告ではなくて、世界を科学的に操作出来るという信仰への警告である。(Baggesen: 61).

筆者は、それとは別にもう一度「反復」について考えをまとめておきたい。

## 5. 「反復」の比較

ヨハネは目くるめく時間旅行を生きて行く。ヤイデが考案した時間の「うしろ跳び」という実験の旅である。このうしろ跳びは、いったい何びとに関わる実験であろうか。詳しい実験装置が分からないが、それはともかくとして、それが自分自身を含む全世界の人々を巻き込むものなのか、自分一人だけに効果のあるものなのか、それとも自分とその周辺の人たちに影響するものなのか。この点は、物語の中では極めて不明確である。理念的には、実験の影響範囲は全人類であろう。時間は全人類のものであり、私有出来ない。すぐ上に挙げた啓蒙運動云々を見ても明らかである。少なくともヤイデはそう考えていたに違いない。ヤイデから引き継いだヨハネにはそのような構想は無かった。善意に解釈して、専ら自分

のより良き生き方を求めてのうしろ跳びによる人生やり直し対策であったろう。とすれば、ヨハネにおいてはうしろ跳びの影響は自分一人が対象に考えられていたのか。スヴェアアの悲しみを救うためにうしろ跳び実験を考えているところからして、そうではないことが分かる。先に引用したイエンスンとボンスゴーのように、何故事故死したモーウンスをうしろ跳びで救ってやらなかったのかと非難している研究者たちもいるのだから、やはり彼女一人が影響の対象ではないだろう。彼女のように心に傷を受けなければ、うしろ跳びの影響が感じられないというのが物語の大きな仕掛けであろうが、不思議な経験をするのが語り手によればヨハネのほんの周辺の少数の人だけであるようなのもまた不可解なことではある。全人類が対象ならば、もっと多くの人々に辻褃の合わぬことが起こって当然であろう。このあたりがSFのSの部分にもある不合理性ではないか。このことはまた、3人称の語り手の信頼度にもよることである。不思議な経験をした(とと思っている)のは世界でヨハネ一人かもしれないのだから。

もう一つ、留意したいのはラスムスのエピソードである。ヨハネと会って、自分がはまっている趣味について話した事実をラスムス自身が否定したことに関して、それが彼の記憶から消されていた、とあるのだが、これはこの物語の中でヨハネやスヴェアアやヤイデとほとんど無関係な、いわば赤の他人がうしろ跳びの影響を受けていたらしい(あるいは、受けていなかったらしい)ことが知れる唯一のケースであろう。メデのエピソードも、これに似るが、これはヨハネの記憶が消えたことによる現象かもしれず、メデ自身の証言がないかぎり真相は分からない。要は、これらの不可思議がうしろ跳びのみならず、ヤイデ・モニケ・ヨハネらによってたびたび言及される世界とその像、世界の分裂、存在と非存在といった根本的かつ主観的観想が加えられて、このテキストを複雑で興味深いものになっているということだろう。

さて、「反復」についてだが、一般論で言えば、『反復』と『時の赴くままに』の「反復」に基本的な違いはない。いずれの場合でも、「反復」は「繰り返すこと」「はじめからやり直すこと」であり、その言い換えのような「回復」「再生」「再起」「再現」「復元」であり、それらからの派生語<sup>24</sup>とも言うべき「コピー」「影」「分身」「二重人格」「分裂」であるからだ。『時の赴くままに』の中におけるこれら「反復」も、『反復』におけるそれと同様の観を呈するが、こちらの方が頻出もし、具体的かつ強烈である。「コピー」は、典型的にモーウンスの偽絵画収集とそれにまつわる議論が代表している。「影」は、スヴェアアのヨハネへのストーカー行為や実験に関するスパイ行為に関連して何度も現われる。「分身」は、10月29日に学食で一人オープンサンドを食べているヨハネのところへ「もう一人のヨハネ」(denne anden Johanne)、「新しいほうのヨハネ」(den ny

Johanne) として現われるが、大きな目で見れば、ヤイデ・ヨハネ・スヴェアアは、うしろ跳び実験に憑かれた分身同士ととれなくもない。「二重人格」は、Je(kyll)・(Hyde 説に顕著である。「分裂」もはっきりと現われる。ヨハネとモーウンスが観に行った喜劇は、その名も『分裂せる魂 (En splittet Sjæl)』(Baggesen: 23) だった。10月26日には、帰り道でのヤイデとの会話で、ヨハネは「お互いに激しく衝突して一人になってしまった二人のように・・・人格崩壊 (personligheds-sammenfald)」と言っている (Madsen: 86) し、1月4日には「頭の中でへし合う二人の人間がいるみたいで、しかも両方とも彼女自身だった」(Madsen: 109) とある。

では、二つの小説における「反復」はどのような点で違うだろうか。もう一度、ヘンレクスンが記し、バゲスンが引用した章句及びそれに関連すると思われるキェルケゴールの記述を挙げてみる(なお、注8、9参照のこと)。

「行動する者だけが時間や人生の流れと同じ方向に向かって動くが、知って追憶する者はいつも現実から思考へと後ろ向きに動く。こういった追憶志向の人間は、魔力の生贄となる・・・」  
(Henriksen: 103-104)

「人生は後ろ向きに理解されなければならない、と哲学が言っているのは全く正しい。だが、そのために人生は前向きに生きられなければならないという命題が忘れられる」  
(SKS 18: 194. *Journalerne JJ 167*)

「反復と追憶は同じ運動である。ただその方向が反対なのだ。というのは、追憶されるものはかつて存在したのであり、それが後方に向かって反復される。それに対して本当の反復は前方に向かって追憶される」  
(SKS 4: 9. *Gjentagelsen*)

ここに見るように、「反復」は、現在から未来へ向かっての前向きの運動であり、それは時間が行なうものではなく、人間実存が自由に主体的に行なう運動でなければならない。この観点から見れば、『反復』のコンスタンティン・コンスタンティウスも青年も不十分な「反復」しかしていない。コンスタンティン・コンスタンティウスは、ベルリンへ運動はしたが、追憶にとどまった。青年はヨブを読み、宗教的な反復の一手前まで進んだが、今一步の行動に欠けていた。ヨブの反復も旧約聖書の中の特異な寓話以上のものではない。皮肉な見方をすれば、娘だけが青年をふるという行動に出て、長く幸せに暮らす結婚を勝ち得たという点で反復をしたと言える。一方の『時の赴くままに』のヤイデ・ヨハネ・スヴェアアはどうか。彼らは、物理的な時間という環境を反復させているだけではないの



か。そこには、人間としての主体的な行動が見られない。しかも、見える行動は、後方に向けてのそればかりである。たしかに彼らの行動は反復であり、やり直しではあるが、過去に向かってうしろ跳びし、自らの記憶を消去するだけでは、幻の行動と言うべきであって、何ら新しいものを生み出すことにはならない。本当の「反復」は、新しい未来のために価値ある過去を不断に現在へ甦らせることでなければならない。そのような「反復」は、キェルケゴールによれば、「永遠」が時間に触れる「瞬間」即ち「時の充実」において、個々の人間が不断に行なう決断の飛躍 (Spring) なのである。『時の赴くままに』においては、「瞬間」「時の充実」は時間装置 (tidsmaskine) の鞍点に、「飛躍」は時間の跳び (tidsspring) にと置き換えられているに等しく、登場人物たちには主体的な決断の飛躍は見られない。

## 6. むすび

マスンは、物語をそのスタートの場へと戻して終わらせた。ヨハネをはじめ登場人物の面々の運命はどうなったのであろうか。うしろ跳び実験の支配者は、ヤイデ→ヨハネ→スヴェアアと引き継がれ、物語がカバーする期間 (1985年の9/13～1986年の2/2) に計6回 (10/30, 12/19, 12/20, 1/27, 1/29, 2/2) のうしろ跳びが前二者によって実施されている。その間3回通算60日程の無風期間 (9/13-10/6, 10/31-11/25, 12/21-1/3) があるように見えるのだが、スヴェアアが2月1日に続いて2日に密に行なったうしろ跳びの連鎖実験に従えば、この全期間がうしろ跳びの影響を受けることになる。だとすると、この間に死んだ人間は、ヨハネをはじめモーウンス・大男の狂人・ヤイデはもちろんのこと、全世界の死者が甦ることになる。何故なら、各うしろ跳びの前の23日が消えて行くのだから。12月20日に死んだモーウンスは、僅かな時間差でヨハネによる同日のうしろ跳びの恩恵には浴せなかったが、スヴェアアのそれで救われることになる。これがめでたいことか否かは軽々には決定出来ないが、「甦り」は、まさに「原初の状態への回復」であるから「反復」の本義である。ガムレ・ビューの小川も息を吹き返したように流れ始めた。キェルケゴールも言っている。

人生は、それが生き抜かれてはじめて解釈されることになる。ちょうどキリストもその復活のあとに初めて、聖書を解釈し、聖書が彼について教えるところを示しはじめたように。

(SKS 18: 99. journalerne ff 122. 1838)

彼らには、この約4ヶ月半の過去を現在の糧にして新しい未来へと前向きに「反復」してもらいたい、というのがマスンの意図であり願いであつたのではな

いだろうか。バゲスンの適切な道徳的警鐘とともに、この作品が教えているのは「反復」が学問や研究の対象ではなく、生き方なのだというのである。

(2010年10月)

## 注

1. マスンの造語で、実際にデンマーク人にある名前ではない。英語読みなら、「ジェイド」か。なお、本稿13ページのJensen & Bundsgaardからの引用文を参照のこと。
2. Aage Henriksen(1921-)。デンマークの文学研究者。バゲスンが言及している *Kierkegaards Romaner* (1954) で哲学博士号を得る。1954-90は、コペンハーゲン大学の北欧文学教授。カーアン・ブリクスンとの1953-63にわたる親交が彼の文学研究に大きな影響を与え、以後彼の関心はブリクスン、キェルケゴールを越えて、ゲーテ、イェンス・バゲスン、N.F.S. グロントヴィ、ソーフス・クラウソン、ヘンレク・イプスンへと広がって行く。
3. これら作品とは、キェルケゴールの文学的3作品「誘惑者の日記」(“Forførerens Dagbog”), 『反復』(*Gjentagelsen*), 「責めありや、責めなしや」(“Skyldig-Ikke Skyldig”) (Henriksen: 8) を指す。
4. Johann Nestroy(1801-62)。ドイツの劇作家にして俳優
5. “Der Talismanen”。Nestroyの三幕喜歌劇。赤毛のティートゥスという髪床職人の恋の遍歴のドタバタを描く。
6. 原初の完全無垢な状態に戻って、そこから再び始めてやり直す、ということ(梶田1975: 299)。これが「反復」の第一義と言ってもよい。
7. Regine Olsen(1822-1904)。キェルケゴールの永遠の恋人と言われ、彼のすべての著作は彼女に捧げられた。彼は、1840/9婚約するが、翌年10月には一方的に破棄する。『反復』は、レギーネの受取り直し(反復)を巡って、ベルリンで執筆されたが、出版直前にレギーネのシュレーゲルとの婚約を知って部分的に書き直されたのが現在目にするテキストである。
8. 「時の充実」ということについて、キェルケゴールの所論を見る。  
 「瞬間は元来時間のアトムではなくて、永遠のアトムなのである。瞬間は、永遠の時間における最初の反映であり、あたかも時間を静止させようとする永遠の最初の試みである」(SKS 4: 391. *Begrebet Angest*).  
 「瞬間は、そこで時間と永遠が触れ合うという両義的なものであり、それ

によって時間性という概念，時間が不斷に永遠を切断し，永遠が不斷に時間に浸透するという概念が措定される．ここで初めて前述した「現在する時間(現在)」，「過ぎ去った時間(過去)」，「来たるべき時間(未来)」という区分が意味を持つのだ」  
(SKS 4: 392. *Begrebet Angest*)

キェルケゴールによれば，このようにして確立した現在が永遠のアトムとしての「瞬間」であり，「時の充実」である．このような「瞬間」は，信仰の実存が自己を取り戻す絶えざる決断の飛躍即ち「反復」によって現われる．「反復」は，「過去として再来する未来」という形で非連続のまま連続する時間を成立させる．『反復』では，青年に「永遠が真の反復」とまで言わせている．

9. ヘンレクソンの論評は，おそらくキェルケゴールの次の有名な章句を踏まえている．

「人生は後ろ向きに理解されなければならない，と哲学が言っているのは全く正しい．だが，そのために人生は前向きに生きられなければならないという命題が忘れられる．この命題は考えれば考えるほど，人生は時間性の中では正しく理解されるようにはならないという結果に終わる．私には，後ろ向きという姿勢をとるために完全に静止することなど一瞬たりともないからだ」  
(SKS 18: 194. *Journalen JJ* 167. 1843)

10. 「絶望の反復」ということについて，バゲスは次のように説明している．

「コンスタンティン・コンスタンティウスが青年を抹殺することで彼から自由になろう，コンスタンティン・コンスタンティウスのそういう試みは却って自分のことを青年の中に或いは青年のことを自分の中へ益々多く書き込むことになるのだから書けば書くほど絶望の様相を呈するだろう，ということを狙う絶望の計画に関わってくる．読者がコンスタンティン・コンスタンティウスの記述を通して知るのとは，つまりは絶望の反復というものが存在するということである」  
(Baggesen: 51)

11. 『時の赴くままに』のあらすじについては，英文での次のインターネットサイトが参考になる．[http://en.wikipedia.org/wiki/Let\\_Time\\_Pass](http://en.wikipedia.org/wiki/Let_Time_Pass)
12. 笑劇 (Posse) は，1840年頃ベルリンで流行を極めた喜歌劇の一種．多くの場合方言が用いられ，地方色に富んだ道化的な喜劇だったという(柘田 1975: 339)
13. オーフース大学とかリーススコウ病院といった固有名詞はテキストには出てこないが，他の地名や Den gamle By といった場所名からもオーフースであることは明らかなので，バゲスもこのように記している．マスンの『時の赴くままに』など 1980年代以降の作品は，その殆どがオーフースを舞台にしていると言われる．彼の作品は，登場人物・場所・出来事が短編・長編小説，戯曲を跨って縦横に相互に編み込まれたネットワーク状態を呈している．Johanne も Sverre も彼の

のちの作品に主要人物として「甦る」。

14. festugen は、町をあげて1週間にわたって開催される大規模な文化行事 (DDO).
15. Den gamle By は、オーフースの野外博物館を中核にして1500年代~1800年代半ばの市場町の家並を残した景観地区。年に32万人の人々が訪れるという (NUDANSK LEKSIKON).
16. 人物に(生没年等)を記したのは筆者、以下同じ。
17. 量子 (kvantum). 物質の最小単位(物質→分子→原子→原子核+電子. 原子核→陽子+中性子)→クオーク. 電子やクオークを素粒子=量子と言う). 堅さも色もなく、波動になったり、粒子のように数えることが出来るが、波のように互いにぶつかるすり抜けたり波の山同士が重なって波が高くなるような干渉効果まで見られる。また、徐々にエネルギー(量子のエネルギーはデジタル)を小さくすることが出来ない。量子がもはや物質とは言えないように、時間量子 (tidskvantum) も時間とは似ても似つかぬものになっている(竹内: 48).
18. エフェソスの人(540?-480B.C.). 「万物は流れる」ことを主張して変化流動こそ實在の真相とした。『反復』第1パートの最終箇所に見られる「一切のものが空しくて流れ去るものなら」というコンスタンティン・コンスタンティウスの呟きも、このヘラクレイトスを想起させる。また、『反復』の冒頭に出てくるディオゲネスも、もちろん運動派である(梶田 1975: 257).
19. パルメニデスとともに、エレア派の代表者。「アキレスと亀」など四つのパラドックスで有名。エレア派は、南イタリアのエレア出のクセノファネスによってB.C. 540年頃に創設された哲学学派で、代表者はパルメニデスとゼノン。實在の一にして不変不動なることを主張した(梶田 1975: 257 など)
20. 「第1章」としたが、実際は første..., andet..., tredje..., と記され、それぞれ motto (題辞文)の書かれた扉が tiende... まで続く10章仕立てになっている。
21. この「鞍点」の説明は不詳。「鞍点」は数学用語で、2変数関数がゼロに等しい偏導関数を持つが最大値も最小値も持たない点とされ、図示すると馬の鞍、あるいは峠のような形をした双曲放物面になる。この図において、 $(x, y) = (0, 0)$ の点を鞍点と呼び、微分するとゼロなのに(峠の)谷底ではないので極小ではなく、また丘の頂上でもないので極大でもない点となる。情報理論、ゲーム理論などでも活用されており、物理・化学では、エネルギーを最小化する点である(『リーダーズ・プラス』、『数学辞典』, <http://mathweb.sc.niigata-u.ac.jp.topic/saddlept.html>). なお, Perpeter, Verdandi についても不詳だが、ジェイデは9月13日のガムレ・ビューにおいて、時間の構成要素 (komponent) として現在5つの成分 (ingrediens) が知られているとして、この二つの他に Arild, Samsara, Harbinger を挙げている(Madsen: 13).

22. ト라우マ (trauma). 「単なる医学的概念と区別するために心的外傷と呼ばれることが多い。つまり、日常生活の中で事件(外的衝撃)が起こり、それが強烈であるために個体がそれを適切に処理できず、心的機構に病因となるような混乱その他の作用が残り続ける場合をいう」(『精神分析事典』)。「こうした経験は抑圧され記憶されない・・・夢や空想の中に繰り返し現われてくる(強迫的反復)」(『心理学辞典』)。まさに、11月20日にヤイデがヨハネに行なった手術及び拷問がこの外的衝撃に当たる。
23. スヴェアアのこの述懐は、本稿 p. 23 に引いたキェルケゴールの日記にある有名な章句に由来する “At forstå livet baglæns” を冠したユランス・ポステン紙のロングインタビュー・シリーズの一でマスンが語った次の言葉とほぼ変わらない。「私には、書くということなしに人生のことを想像するのは難しい。もし物語を作って語るということをしてこなかったなら、私は自分が首尾一貫した存在であり得たかどうか想像することが出来ない」(Søndag den 26. december 2004. *Jyllands-Posten*)
24. 「言い換え」とか「派生語」と簡単に記したが、若干の説明を加えておく。gentagelse は、動詞 gentage が名詞化された語で「再び・取ること」であり、したがって「繰り返すこと」であるが、注5にも記したようにその本義は「元の状態に戻ってそこからまた始める」ことである。これらの同意語的な言葉として本稿 p. 22 に並べたような「言い換え」語が使われ、それら全体を表わす言葉として「反復」が用いられている。キェルケゴールの『反復』においても、この「反復」がこれら多くのニュアンスを持つ言葉として、その時々様々な状況において使われている。ただ最近では、大谷 長(1915-99 キェルケゴール研究者)の説に則って、これをその元の語義に近い「受取り直し」と訳す傾向が強くなっており、*Gjentagelsen* も『受取り直し』とされる。また、これらの語義や「言い換え」は、二つあるいは複数の物や事の表/裏、虚/実、接近/乖離、合一/離反、重複/剥離に類する相互関係(元の形と後の形)のイメージを介して「コピー」「影」等々の「派生語」を産み出すのである。なお、筆者は gentagelse を限定的に「受取り直し」とするよりも、多義的なニュアンスを包含した「反復」とするのをよしとしたい。

# En studierapport om Svend Åge Madsens ‘gentagelse’ under henvisning til Søren Baggesens essay

Katsuki Kubota

## Resumé

Begrebet ‘gentagelse’ er et af de begreber hos Søren Kierkegaard som er vanskeligst at forstå, og et af temaer som jeg er mest interesseret i. I Kierkegaards roman *Gjentagelsen* skrevet under pseudonymet Constantin Constantius undersøger både Constantin Constantius og det unge Menneske om gentagelsen er mulig, og det mislykkes for dem, fordi gentagelsen er alt for religiøs og transcendent for dem.

Svend Åge Madsens science fiction *Lad tiden gå* skriver *Gjentagelsen* ind i sig og hentyder mange steder til *Gjentagelsen* og ‘gentagelsen’. *Lad tiden gå* handler om kronofysikeren professor Jeydes opdagelse af, at tiden består af kvanter med ingenting imellem, og at han kan sætte tiden 23 dage tilbage med et simpelt fysikapparat. Eksperimentet med tilbagespring bliver overtaget af hans assistent Johanne og hendes studerende Sverre, og der sker mange underlige begivenheder og uoverensstemmelser i løbet af de 23 dage før ethvert eksperiment. Romanen slutter med, at Sverre i en lang række tilbagespring bringer Johanne tilbage til udgangspunktet for romanen. Det interessante er, at der i teksten dukker forskellige allusioner til *Gjentagelsen* op.

Litteraturprofessoren Søren Baggesen skitserer både *Gjentagelsen* og *Lad tiden gå* og kommenterer ‘gentagelsen’ fra den civilisationskritiske synsvinkel i sit essay “*Gjentagelsen* og Svend Åge Madsens gentagelser”.

I denne artikel følger jeg Svend Åge Madsens roman under henvisning til Søren Baggesens essay, og analyserer og kritiserer gentagelserne i romanen fra det litteraturkritiske synspunkt. Gentagelserne i *Lad tiden gå* er meget spændende når de læses som et romanelement, men jeg må sige, at tilbagespringet i tiden ikke kan være en ægte gentagelse. Søren Baggesens kommentarer til de to romaner er stort set rimelige. Men jeg er utilfreds med, at han ikke omtaler en ægte gentagelse til trods for, at gentagelsen i *Gjentagelsen* blev forkastet af personen Mogens i *Lad tiden gå*.

Hvad er ‘gentagelse’? Kierkegaard sagde, at “den egentlige Gjentagelse erindres forlænds”. Jeg vil gerne forske videre i temaet ‘gentagelse’ og jeg vil hele tiden sammenholde det med Kierkegaards behandling af dette emne.

## テキスト及び参考文献

### テキスト

Madsen, Svend Åge. 1986. *Lad tiden gå*. København: Gyldendal.

### 参考文献

- Baggesen, Søren. 1993. “‘Gjentagelsen’ og Svend Åge Madsens gentagelser”. *Natur/videnskab/fortælling*, 40-62. Odense: Odense Universitetsforlag.
- Cappelørn, N. Jørgen, Joakim Garff, Jette Knudsen, Johnny Kondrup, Alastair McKinnon & Finn Hauberg Mortensen. 1997-. *Søren Kierkegaards Skrifter*. København: GADs Forlag.
- Grund, Jens & Chr Thy Petersen. 2004. “Ud af market”. d.26.12. *Jyllands-Posten*.
- Henriksen, Aage. 1969. *Kierkegaards Romaner*. København: Gyldendal.
- Jørgensen, Jens Anker, Johnny Kondrup, Peter Olivarius, Bjarne Sandstrøm, Svend Skriver, Marianne Stidsen & Knud Wentzel. Redigeret af Jørgensen, Jens Anker & Knud Wentzel. *Hovedsporet Dansk litteraturs historie*. København: Gyldendal.
- 久保田勝己. 2005. 修士論文『「反復」研究序説 — Constantin Constantius Gjentagelsen 解説』. 大阪外国語大学 言語社会研究科.
- 竹内薫. 2006. 『時間論の基本と仕組み』. 東京：秀和システム.
- 榊田啓三郎. 1962. 『キルケゴール全集』解説. 『キルケゴール全集 第5巻「おそれとおののき」』. 東京：筑摩書房.
- . 1975. 『キルケゴール全集』解説. 『キルケゴール全集 第6巻「反復」』. 東京：筑摩書房.
- 村上恭一. 2005. 『哲学講義』. 東京：成文堂.
- ラーセン, ステフェン, ハイルスコウ監修. 早野勝己監訳. 1993. 『デンマーク文学史』. 東京：ビネバル出版.

### インターネット資料

- Aage Henriksen-Den Store Danske. [http://www.denstoredanske.dk/Kunst\\_og\\_kultur/Litteratur/Dansk\\_litteratur/Kritikere/](http://www.denstoredanske.dk/Kunst_og_kultur/Litteratur/Dansk_litteratur/Kritikere/)
- 鞍点. <http://mathweb.sc.niigata-u.ac.jp/topic/saddlept.html>
- Hvorfor Århus bliver ved med at duke op i mine bøger. <http://www.litteratursiden>.

- Dk/artikler/hvorfor-%C3%A5rhus-bliver-ved-med-dukke3-o  
 Hvor går tiden hen, når den går? <http://www.ommadawn.dk/design2.php?sideid=737>  
 Jensen, Thorbjørn Hertz & Jeppe Bundsgaard. 1996. "Fortællingens gentagelse Om Fortælling og tid i Svend Åge Madsens forfatterskab". <http://hjem.get2net.dk/JeppeB/litterat/svendage.htm>  
 Let Time Pass. [http://en.wikipedia.org/wiki/Let\\_Time\\_Pass](http://en.wikipedia.org/wiki/Let_Time_Pass)  
 Madsen, Karina Søby. 2010. Madsen, Svend Åge. Madsen, Svend Åge/Forfatterweb. <http://www.forfatterweb.dk/Oversight/zmadsenOO>  
 Science Fiction Cirklen-Svend Åge Madsen. <http://www.sciencefiction.dk/artikler/forfattere/svend-e-madsen.html>  
 Svend Åge Madsen-Den Store danske. [http://www.denstoredanske.dk/Kunst\\_og\\_kultur/Litteratur/Dansk\\_litteratur/Efter\\_194](http://www.denstoredanske.dk/Kunst_og_kultur/Litteratur/Dansk_litteratur/Efter_194)  
 Svend Åge Madsen. Svend Åge Madsen/Litteratursiden. <http://www.litteratursviden.dk/Forfatter/svend-%C3%A5ge-madsen>.  
 Svend Åge Madsen (forfatter). Wikipedia, den frie encyklopædi. [http://da.wikipedia.Org/wiki/Svend\\_%C3%85ge\\_Madsen\\_\(forfatter\)](http://da.wikipedia.Org/wiki/Svend_%C3%85ge_Madsen_(forfatter))  
 Søren Baggesen-Den Store Danske. [http://www.denstoredanske.dk/Kunst\\_og\\_kultur/Litteratur/Dansk\\_litteratur/Kritikere/](http://www.denstoredanske.dk/Kunst_og_kultur/Litteratur/Dansk_litteratur/Kritikere/)  
 Øhrstrøm, Peter. Tid og logic-historisk set. Institut for Kommunikation. Aalborg Universitet. <http://www.hum.aau.dk/~poe/ARTIKLER/tidcaelo.pdf>

## 辞書・事典類

- Hjorth, Ebba & Kjeld Kristensen (hovedredaktører). 2004. *DEN DANSKE ORDBOG*. København: Gyldendal  
 Bolette, Rud. Pallesen & Christian Becker-Christensen (hovedredaktører). 2002. *NUDANSK LEKSIKON*. København: Politikens Forlag  
 相田重夫ほか. 1996. 『コンサイス外国人名事典』. 東京：三省堂.  
 安宇植ほか. 2002. 『世界文学事典』. 東京：集英社.  
 小此木啓吾・北山修ほか. 2003. 『精神分析事典』. 東京：岩崎学術出版社.  
 外林大作・辻正三・島津一夫・能見義博. 1995. 『心理学辞典』. 東京：誠信書房.  
 日本数学会. 2004. 『数学辞典』. 東京：岩波書店.  
 松浪信三郎・飯島宗享. 1964. 『実存主義辞典』. 東京：東京堂.  
 松田徳一郎ほか. 1994. 『リーダーズ・プラス』. 東京：研究社.